東国文化自由研究レポート

研究テーマ

金冠の謎に追る

～敵であった新羅と前後1世紀の間に何が…～

提出日　2023年　8月21日（月）

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年　2組　26番

氏名　鳴川優乃

1　きっかけ

古墳のことについて考えたとき、以前住んでいた場所の近くにあった**山王金冠塚古墳**のことを思い出しました。近所にあったにも関わらず、一度も行ったことがなかったのでどのような古墳なのか気になり調べてみることにしました。

2　山王金冠塚古墳について

学校で配布された東国文化副読本を見てみると、私が調べたい山王金冠塚古墳について書かれているページがありました。また、情報の確認のため前橋市のホームページでも調べました。そこで得た情報は以下の５つです。

・前橋市山王町にある。
・約５３メートルの前方後円墳。
・**６世紀後半**に造られたとみられる。
・古墳の名前の由来となった**金冠**は、全体の形がよくわかる全国でも数少ないものの一つである。
　現在は、**東京国立博物館**に保管されている。
・金冠は**新羅**（韓国の慶州）の古墳で出土した金冠とよく似ていることから、新羅との深いつながりを示している。

3　疑問と予想

（1）**疑問**

なぜ、全国でも数少ない貴重な金冠がここにあったのか。

予想

当時、倭と新羅は**友好関係**にあり、交流が深かったため、倭に金冠が伝わってきたからではないかと予想しました。
そして、東国文化副読本の「はじめに」というところに書いてあるように、この頃、ヤマト王権のあった近畿地方が日本の政治・経済・文化の中心地でしたが、群馬はヤマト王権が列島統一のために最も重視した国の一つでした。そのため、倭（ヤマト王権）に入ってきたのち、群馬に伝わったのではないのだろうかと予想しました。

（2）**疑問**

ここで学校で以前習った**倭・高句麗戦争**を思い出しました。なぜかというと、確かこの戦争はこのころの時代にあり、倭と新羅は敵として戦っていたからです。
さらに、このあとには**白村江の戦い**があり、倭は、新羅から百済を守ろうと支援しましたが、失敗してしまったはずです。なぜ、敵対関係にあった国と深い交流があったのか疑問に思いました。

予想

・戦争で倭が攻め込んでいって金冠を略奪したのか。
・戦争で倭が勝ち、新羅に金冠を朝貢させたのか。
・金冠そのもの、または、金冠を作る技術が何らかの方法で伝わり、自国で作ったのか。

4　調査方法

①山王金冠塚古墳に行き、実物を見てどのようなものかを知る。
②群馬県立歴史博物館に行き、同じ時代の他の群馬の古墳の様子や出土された物を知る。
③インターネットや本などで倭・高句麗戦争について調べる。
④インターネットや本などで白村江の戦いについて調べる。
⑤インターネットや本などで新羅について調べる。
⑥前橋市立図書館に行って山王金冠塚古墳についての資料や書籍を借りる。
⑦東京国立博物館に行き、山王金冠塚古墳から出土した金冠を実際に見てどのようなものかを知る。
⑧これらの情報からもう一度疑問と予想を整理する。
⑨これらのことから自分なりの結論を出す。

5　調査

①山王金冠塚古墳について

２０２３年７月２３日に実際に山王金冠塚古墳に行きました。古墳は、住宅地に囲まれていて、公園が隣接されていました。特に管理され大事にされている様子もなく自由に出入りできるようになっていて、上に登ることもできました。ここから東京国立博物館に保管されるほどの金冠が出土したとは思えないくらい町に溶け込んでいて、びっくりしました。
実際に古墳を見た限り、外見から金冠につながるような特徴は特に見受けられませんでした。古墳も小さめで、金冠を所有していたほどの権力の持ち主が埋葬されていたとは考えにくい大きさでした。
とても貴重なものが出土しているのにも関わらず、その存在感があまりなく、勿体ないと感じました。なにかこの古墳を変えるいい方法はないのか考えていきたいです。

②群馬県立歴史博物館について

２０２３年７月２３日に実際に群馬県立歴史博物館に行きました。私が調べたい山王金冠塚古墳に直接つながる資料や情報はありませんでしたが、群馬県のこれまでの歴史を実物のものを見たり、石に触ったりなど肌で感じながら学ぶことができてよかったです。また、私が調べたい古墳時代の情勢についても知ることができました。この博物館の展示パネルには、中国や朝鮮半島の国々と積極的に外交をしていたと書かれていました。朝鮮半島についての展示では、「高句麗は、隋からの４度に渡る侵略を受けたが全て撃退した。」とあり、「新羅は、中国王朝との連携を深め国力を高めていった。」とありました。さらに、「百済は、新羅との対立が激しくなり倭との連携を深めていった。」と書かれていました。

このことから、倭は、新羅と対立している百済と連携を深めていたことと、高句麗と新羅の国力が高かったことが分かりました。

そこでさらに、２つの戦争について詳しく調べていきます。

③倭・高句麗戦争について

倭・高句麗戦争は５世紀前半頃に朝鮮半島で行われた、主に倭と高句麗の間での戦争です。４世紀前半頃、中国の北や東から動きを強めていた高句麗は、勢力を拡大しながら、朝鮮半島の北にまで支配を広げていました。そして、３１３年には中国の植民地であった楽浪郡を滅ぼしてしまいます。さらに、４世紀後半になると、高句麗は今度は朝鮮半島の南を攻めるようになり、同時期に動きを強めていた新羅や百済、伽耶などを圧迫していきました。

このとき、倭は貴重な鉄資源を確保するために伽耶と親交関係にあったため、倭も高句麗との争いに巻き込まれてしまいます。また倭は、伽耶と親交関係にあった百済とも友好的でした。そこで、倭は伽耶や百済を守るため高句麗と戦うことになったのです。

一方、新羅は「強いものに従おう」という体制であり、これまでに伽耶と対立していたため、この当時強かった高句麗と手を組み、倭と百済と伽耶と戦ったのが、倭・高句麗戦争です。

このことは、高句麗にある**好太王の石碑**からもわかります。

このことから、５世紀前半の倭と新羅は敵対関係にあったと考えられます。さらに、倭は伽耶や百済と友好関係にあったことがわかります。またこの頃、新羅は高句麗と手を組んでいたことがわかりました。新羅は、強いものに従おうという体制であったり、伽耶と対立していたからなどの理由で高句麗と手を組んでいるものの、決して高句麗と友好的であったわけではないと考えられます。また、この戦争では高句麗が勝利したそうです。

④白村江の戦いについて

白村江の戦いは、天智天皇（中大兄皇子）が即位して２年目（６６３年）に朝鮮半島の白村江というところで行われた、百済の復興を目指す倭・百済の連合軍と唐・新羅の連合軍との戦争のことです。

まず、なぜ戦争が起きてしまったのか、戦争の目的など戦争が起きる前のことについて調べていきます。

５６２年には、伽耶はすでに新羅に滅ぼされてしまっています。その理由としては、高句麗が南の新羅や百済を攻めていったため、新羅は、さらに南に位置していた伽耶を手に入れたいという思いが高まり、新羅が伽耶を滅ぼしました。

そして、隋の頃から高句麗遠征がうまく行かず、唐に変わってもうまく行かない唐と国力をさらに高めたい新羅は、「高句麗を滅ぼす」という同じことを考えていました。そのため、新羅と唐は手を組むことになりました。

そして、まずは６６０年に唐と新羅の連合軍は百済を滅ぼし勢力を更に拡大します。それを知った倭は、唐の圧力は日本にまで及びかねないのではないか、と天皇が判断しました。百済復興へ手助けすると決意し、６６２年、大軍を百済に送り込みます。そして、６６３年に倭は白村江で戦いますが、大敗してしまいました。中国の歴史書に「海は血で赤く染まった。」と書いてあることが衝撃的でした。

このことから、倭と新羅は７世紀中旬頃も敵対関係であったと考えられます。
ここまで調べて２つの戦争から、２ページの（２）の予想の１つ目『戦争で倭が攻め込んでいって金冠を略奪したか。』と２つ目『戦争で倭が勝ち、新羅に金冠を朝貢させたのか。』という予想がとても考えにくくなります。そのため、３つ目の『金冠そのものまたは、金冠

を作る技術が何らかの方法で伝わり、自国で作ったか。』と言う予想がかなり優勢になります。

ここまで２つの戦争について詳しく調べてきました。山王金冠塚古墳が造られたのは、６世紀後半頃だと考えられており、倭・高句麗戦争と白村江の戦いの間の２世紀の間に日本に金冠が伝わっているので、この間に新羅との間に何があったのか、何らかの方法とはなにかに着目して、新羅について更に調べて行こうと思います。

⑤新羅とはどのような国なのか

まずは、一番簡潔にまとまっている辞書で調べることにしました。
デジタル大辞泉とコトバンクによると以下のことがわかりました。

・古代朝鮮の王国。
・都は慶州。
・７世紀後半、唐と結んで百済・高句麗を滅ぼし６６８年、朝鮮全土初の統一国家となった。
・律令や仏教文化など大陸の制度・文物を移入し、中央集権的統治を行った９３５年、高麗の王権に滅ぼされた。
・６０３年から６６１年の間の王に第２９代の王、武烈王（金春秋）がいた。

調査④でしらべた白村江の戦いのあと唐と新羅の連合軍は、唐だけでは倒せなかった高句麗を滅ぼし、新羅が朝鮮を統一したことに驚きました。しかし、約２８０年後には高麗という国に滅ぼされてしまっていることにもとても驚きました。

さらに、金冠が伝わった間の時期であると考えられる、６世紀初旬から後半にいた王の金春秋についても気になったので調べていきます。
さっそく、金春秋について調べていると、王の間の期間だけではなく即位前のことについても多く書かれていました。
そこで金春秋の即位前について調べてみると、金春秋の即位前、新羅は、唐からの遠征を攻撃して追い払うことができ波に乗っていた高句麗と、伽耶を８０年ぶりに新羅から取り返すことができた百済からの圧迫によって、活力をなくしてしまっていることがわかりました。困り果てた新羅は、倭・高句麗戦争で手を組んだ高句麗（６４２年）と海を挟んで隣の国であった倭（６４７年）に助けを求め、王族の１人であった金春秋を派遣していたことがわかりました。しかし、金春秋は目的を達成できなかったそうです。
倭に派遣された翌年（６４８年）には、唐に派遣されました。ここでは巧みな外交力を発揮し、ついに６６０年には唐の力を借りて百済を滅ぼしました。これがさきほど調べた白村江の戦いに繋がってきます。

王妃の金冠　慶州皇南大塚北墳出土、高さ27.3cm、国宝第191号

金春秋とはどのような人物か調べているうちに、金春秋の画像を見ました。この写真でもそうですが他の写真でも金春秋は金冠をかぶっています。
さらに、この人物について調べていると「遣新羅使」「新羅使」という言葉が出てきました。遣新羅使とは、日本から新羅に派遣された人たちのことです。７世紀後半からこの活動が行われています。新羅使とは、新羅から倭に派遣された人たちのことです。これは、６世紀後半から行われています。このことから、両国は密接な外交関係を保っていたと考えられます。また、この目的は、先進技術の収集のほかに、海外情勢の調査もあったと考えられています。

そこで次に、夏休みに日本に来ていた韓国で日本語教師をしている母の高校時代の友人に聞きわかった、山王金冠塚古墳から出土した金冠とよく似ている冠が出土したと言われている新羅の皇南大塚古墳や天馬塚古墳について調べることにしました。
まず最初に皇南大塚古墳についてです。韓国の国立中央博物館のホームページを参考に調べました。

皇南大塚古墳は1973年から1975年まで文化財管理局文化財研究所によって発掘されました。
南と北に二つの墓をくっつけた双墳であり、先に造られた南墳は王の墓です。北墳は少しの時間を置いたあとに隣接して造られた王妃の墓であることが発掘を通して明らかになっています。北墳が王妃の墓である決定的な証拠は副葬品に「夫人帯」という文字が刻まれていたためです。この「夫人」という表現は、当時、王妃を指す言葉だと母が教えてくれました。つまり、「夫人帯」には王妃の帯飾りという意味があると言えます。皇南大塚北墳に葬られた王妃は金冠と金で飾られた帯飾り以外にも金製腕輪、金製指輪などが出土していてとても権力を持った王妃だったと考えられます。
さらに調べていくと王は金銅製冠を、王妃は金冠をかぶっていたことがわかりました。銅の板に金で加工した金銅製冠と純粋な金冠は材質で大きな違いがあります。私は王の方が純粋な金の材質でできていると思っていたのでびっくりしました。
次に、天馬塚古墳についてです。天馬塚古墳は、１９７３年４月６日から１２月４日まで発掘が行われたそうです。この古墳で出土した遺物は、５世紀末から６世紀初めのものとされています。特にこの古墳から出土した金冠は、同じ慶州市内から出土された金冠と比べても大きく派手であったそうです。また、この古墳からは、金冠帽も出土していることがわかりました。

このことから、何らかの方法とは、金春秋が倭を６４７年訪れた際に助けを求めただけでなく、新羅の金冠そのものを持ってきたり、金冠の文化や技術を伝えたりしたと考えられます。また、王族として倭に派遣されているため、金冠をかぶって倭を訪れ、それを見た倭人が真似して作ったことも考えられます。
さらに、新羅使が山王金冠塚古墳が造られた時期と同じ６世紀後半に新羅から倭に派遣されていることから、新羅使が伝えた可能性がとても高くなります。
また、出土した金冠が純粋な金でできているのか、金銅製なのかによって埋葬されてる人物が変わります。このことから山王金冠塚古墳から出土された金冠は、金銅製なので、埋葬されていた人物は王（男性）であったことがわかります。

ここまでで、倭と新羅との戦争のことや新羅についてなどの外交について調べてきました。ここからは、山王金冠塚古墳、山王金冠塚古墳から出土された金冠についてより詳しく調べます。

⑥前橋市市立図書館で借りた資料について

この図書館の館内マップを見てみると、２階に郷土資料室があることがわかり、行ってみることにしました。
そこに行ってみると、群馬県や前橋市に関わる歴史書がたくさん置いてありました。あまりに膨大な資料から私と父では山王金冠塚古墳に関する資料を探すことができず、司書さんに聞くことにしました。聞いてみると「夏休みの宿題かな？」といって山王金冠塚古墳や周辺の古墳に関する資料をたくさん持ってきてくれました。
借りた本からわかった新羅と金冠に関する情報は以下の通りです。
・この冠は、山字式あるいは山字式冠と呼ばれている。
・日本列島で山字式冠が出土しているのは山王金冠塚古墳が唯一。
・このような冠は、新羅の有力古墳には必ずと言っていいほど出土している。
（皇南大塚古墳や天馬塚古墳が代表的）
以上、「群馬の古墳物語ー東国の古墳と文化を探るー」から
・金冠は新羅の天馬塚古墳から出土のものと似ていると話題になったが天馬塚古墳は金製、山王金冠塚古墳は銅地に金メッキの金銅製であり、製作技法が異なることが注意点であること。
以上、「群馬の古墳を歩く」から
・金冠は全国でも唯一の出土品であることから、この地に朝鮮半島の新技術が伝来したと考えられること。
以上、「金冠塚（山王二子山）古墳調査概報ー環境整備事業に伴う発掘調査ー」から

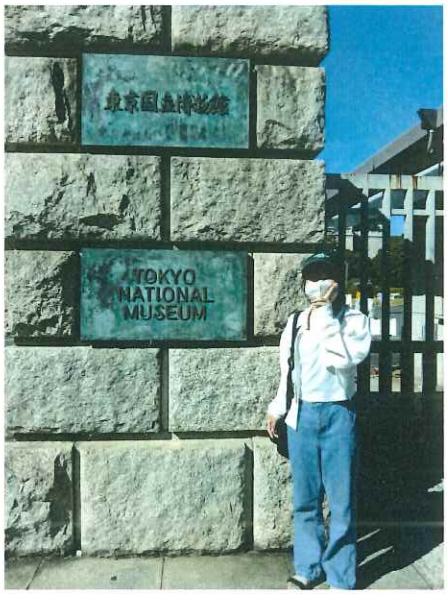
この５点から、山王金冠塚古墳から出土した金冠は、新羅の有力古墳である皇南大塚古墳や天馬塚古墳から出土した金冠と同じ山字式冠であるが、製作方法が異なることがわかりました。

しかし、⑤で皇南大塚古墳について調べたとき、金製と金銅製は埋葬されていた人物が王か王妃かによって変わる文化があります。そのため、製作方法が異なることの謎は埋葬されている人物が王であることで解決します。
さらに、また韓国に住んでいる母の友人に新羅について聞いたところ、新羅は他の朝鮮半島の国と比べて中国やインドなど他の国との交流が深く、きらびやかな品が多かったようだという情報を得ました。このことから、新羅から金冠が出土したことに納得するとともに、新羅は他の国とかなり積極的に外交する国だったとわかります。

このことから、金冠そのものが倭に入ってきたこと、金冠を作る技術や文化が倭に入ってきたことの２つの可能性は同じくらい高いと考えられます。

ここまでで、金冠や山王金冠塚古墳についての情報を本やインターネットで調べ、そこから考えられることをまとめてきました。そこで、次は実際に金冠を見に行こうと思います。
本やインターネットだけではわからない細部のつくりを観察したり、より詳しい金冠についての情報を入手したいと思ったからです。金冠が保存されている場所に関しては、複数の本やインターネットのサイトで東京国立博物館と書かれていたので間違いないと思いました。小学生の頃に東京国立科学博物館に行ったことがあるのですが、今回行く東京国立博物館は初めてなのでとても楽しみです。

⑦東京国立博物館について



２０２３年８月２日に実際に東京国立博物館に行きました。母と韓国から来ている母の友達の家族と一緒に、最寄り駅の前橋駅から電車で約２時間半で行くことができました。上野駅の公園方面の改札を出ると、緑豊かな広い道が広がっていました。国立の美術館や科学博物館、上野動物園などたくさんの人で賑わっていました。国立博物館は、駅から出て少し歩いて右に曲がるとあります。
この博物館には、主に本館、平成館、東洋館、法隆寺宝物館、黒田記念館、表慶館があります。館内はとても広くて私が見たい金冠はどこにあるのか分からず、インフォメーションで訪ねてみました。すると、平成館の１階の考古展示室か東洋館の５階の朝鮮半島についての展示室にあるかもしれないと教えてくれました。また、本やインターネットに「東京国立博物館に収蔵」と書かれていても、この博物館は色々な所からたくさんのものが集まってくるためすべてを展示しきれず、「保管されているだけで展示はされていないかもしれない。」と言われ、金冠が展示されているかドキドキしながら探しました。

まずは、最初に平成館の考古展示室に行きました。
ここでは、日本の旧石器時代から江戸時代までの作品が展示されていました。実際に作品に触れられるコーナーもありとても面白かったです。縄文時代の土偶や、弥生時代の銅鐸は、私も実際に触ったり鳴らしてみたりしてみました。
さらに進んで、古墳時代のコーナーに来ると、更にドキドキワクワクしながら金冠を探しました。途中には、熊本県の江田船山古墳から出土した山王金冠塚古墳と同じ金銅製の作品がたくさんありました。江田船山古墳からはワカタケル大王の鉄剣や金銅製冠帽なども出土され気になっていた古墳でした。
そして、古墳時代の展示がそろそろ終わってしまいそうな時に、ついに金冠を発見しました。遠くから見ても目を引きつけられるような輝きと存在感でした。私は、あまりの嬉しさにすぐに駆け寄りました。展示されていたのは、模造品でしたが、とても見ごたえがありまし

た。金冠は、思っていたよりもひとまわり小さく感じたのですが、これを実際に頭にかぶると考えると妥当な大きさでした。本に書いてあったとおり金冠は、漢字の「山」や「出」のような形が連なっている冠でした。さらに、その上の部分がハートの形になっていました。
私が見ていると、後ろで金冠を見ていた韓国に住んでいる母の友人が韓国で一番規模の大きい国立中央博物館で見た新羅の金冠より少し豪華さが足りない気がすると言いました。
さらには、素朴な雰囲気が伽耶のものに似ていると言いました。しかし、複数の本やインターネットのサイトに新羅系のものと書かれていたため、新羅のもので間違いはないと思い、以下の２つのことを考えました。

１）金春秋がかぶっていた金冠を見て、真似して作ったという考え方のように、新羅から倭に金冠そのものが伝わったのではなく、金冠の技術や文化が伝わったためだから。
倭人はその金冠の豪華さまでは正確に再現できなかったため、韓国の国立中央博物館のものと比べて豪華さが足りないように感じたのではないか。
２）金冠そのものは伝わったが、豪華なものは新羅の中でもとても権力を持っていた人のみに与えられたものであり、倭に伝わったものは韓国の国立中央博物　館のものより下の地位のものなので、豪華さが足りないように感じたのではないか。

韓国の国立中央博物館で実際に金冠を見ないとわからない貴重な感じ方が聞けて良かったです。

次に、東洋館の５階の朝鮮半島に関しての展示室に行きました。東洋館に行く途中もたくさんの建物があり、その１つ１つもとても大きくてさすが国立博物館だなと思いました。
東洋館に着きエレベーターで５階まで上がると、すぐに朝鮮半島の展示がありました。金冠を探し歩いてみましたが、山字式の金冠は見つかりませんでした。ですが、同じ金冠という名前で展示されていた冠がありました。その冠は伽耶のもので、高さがあまりなく、羽のようなものがついていました。たしかに、冠の形以外に特に飾りはなく素朴な感じが平成館で見た山王金冠塚古墳の金冠と似ていました。
東洋館を出る際にお土産ショップがあり、せっかくなので行ってみることにしました。そこには、展示されている作品をモチーフにした雑貨だけでなく、展示物に関する歴史の本がたくさん売っていました。その中で目に止まったのが、古谷毅さんの「古墳時代　美術図鑑」でした。中でも特に興味を持ったのは、倭の有力者たちは朝鮮半島との交流の中で、様々なものを取り入れる一方で、それを自分たちの美意識に合わせてアレンジしていくようになったと書かれていたのがとても印象的でした。
さらに、そのために朝鮮半島の金工の職人を盛んに招き入れるようになったとも書かれていました。
日本人は、中国や朝鮮半島と比べてシンプルなもののほうが好まれているイメージがあるので、この頃に、朝鮮半島から伝わったものは倭の有力者たちの美意識によって、シンプルにされたと考えることもできます。このことから、母の友人が言っていた山王金冠塚古墳から出土された金冠の豪華さの足りなさが理解できます。

最後に、金冠には関係なかったのですが、時間もあったので本館に行きました。
入り口からとても豪華で中もとても広かったです。１階部分を見て回りましたが、やはり金冠に関する展示はありませんでした。しかし、展示されているもの１つ１つとても見ごたえがあり楽しかったです。
本館は展示ゾーンだけでなくお土産ショップも大きかったので見ることにしました。やはり本館のショップも東洋館のショップと同じように歴史に関する本が販売されていました。その中でも気になる本がありました。その本は、若挟徹さんの「古墳時代ガイドブック」です。そこには、外交上は敵視していたが、モノの交流は盛んであり、新羅系の遺品が日本の古墳からたくさん見つかっていると書かれていました。また、新羅系の遺品が他に見つかっている古墳の例では、平成館にも展示があった熊本県の江田船山古墳が挙げられます。この古墳は、⑤でしらべた新羅の天馬塚古墳から出土した

金冠帽とよく似ているものが出土していることから山王金冠塚古墳と同じルートで伝わったのではないかと思います。この古墳は、５世紀後半から６世紀初めに造られたものだと考えられており、⑤で調べた通り、天馬塚古墳も５世紀後半から６世紀はじめなので、時期が一致します。この古墳に埋葬されていた人物は朝鮮半島との外交で重要な役割を果たした人だと言われています。

このことから、調べた２つの戦争では敵対関係でしたが、その裏では、ものの交流を行っていたと考えられます。倭・高句麗戦争と白村江の戦いでは、敵対関係にはありましたが新羅とは、直接的には戦っていなかったためだと思います。
さらに、倭の有力者が自分たちの美意識に合わせていったことから予想した（１）の可能性が低くなります。
また、熊本県の江田船山古墳は埋葬者が新羅との外交で重要な役割を果たしたため、副葬品に新羅系のものがあったと考えられていることから、山王金冠塚古墳の埋葬者にも同じことが言えるのではないかと考えられます。

ここまでで、戦争や新羅、金冠のことなどたくさんのことを調べてきました。調査はこれで終了し、ここからは疑問をもう一度整理してから、自分の考えをまとめていこうと思います。

６　疑問（再確認）

疑問

この研究のテーマである山王金冠塚古墳は６世紀後半に造られたと考えられており、ここから出土した金冠は、新羅で出土した金冠とよく似ていることから新羅との強いつながりを示しています。似ている金冠が出土したということは、このころ倭と新羅は深い文化の交流をしていて友好関係にあったはずです。それにもかかわらず、これまで調べてきた倭・高句麗戦争と白村江の戦いで、倭と新羅はどちらの時代も敵対関係にありました。また、倭・高句麗戦争は５世紀前半頃に、白村江の戦いは、７世紀後半頃に行われています。なぜ、古墳が造られる前後一世紀に戦争で敵対関係にあった新羅と深い文化の交流をしていたのか疑問に思いました。

７　結論

これまで調べてきたことから、最初に予想した３つ目の『何らかの方法で、金冠そのもの、または、金冠を作る技術や文化が伝わり自国で作った。』ことが一番有力になりました。
その理由は、倭と新羅は敵対関係にありましたが、直接的には戦っておらず、本やインターネットで調べても倭が新羅に攻め込んでいったと書かれていないからです。このことから、予想した１つ目の『戦争で倭が攻め込んでいって金冠を略奪したのか。』の可能性はなくなります。
また、２つの戦争では、両方とも倭は負けてしまっていて、２つ目に予想した『戦争で倭が勝ち、新羅に金冠を朝貢させたのか。』の可能性はなくなるからです。
さらに、〝何らかの方法〟とは金春秋、または新羅使が伝えたことが考えられます。なぜなら、金春秋や新羅使は、山王金冠塚古墳が造られたとされる６世紀前半から後半に新羅から倭に派遣されているからです。目的としては、金春秋は倭に助けを求めるため、新羅使は、先進技術の収集、海外情勢の調査のためです。これらの人は、国として送られてきている人なので、まずは大和政権（４世紀から７世紀頃）を訪問したと考えられます。その後、大和政権が列島統一のために最も重視していた国であった群馬に伝えたと考えられます。さらに、群馬の中でも山王金冠塚古墳の周辺地域は、この頃最も栄えていた朝倉・広瀬古墳群なので、金冠が伝わったことも予想できます。
倭と新羅は、外交上では、敵対関係にありましたが、ものの交流は盛んに行われていたとも本に書かれていました。ものの交流は仲の良い国とだけ行うものではなく、様々な理由で訪問する際にものの交流をすると考えられます。
さらに、新羅が国として送った金春秋や新羅使なので、冠が純粋な金か金銅製なのかによって埋葬される人物が王か王妃か変わることも倭に伝えたと思います。そのため、山王金冠塚古墳に埋葬されている人物は王であったのではないかと予想もできました。

8　感想

今回、山王金冠塚古墳の金冠から考えられる倭と新羅との関係の謎を調べてきました。
実際に古墳や群馬県立歴史博物館、東京国立博物館などに行くことで、文章からだけではわからない、見て感じるものを体感しました。今まで何かの目的があって博物館に行ったことがなく、今回初めて金冠を見に行くことを目的に東京まで行き、目的のものに出会えたときの、ものすごい嬉しさと感動を味わいました。そのとき、改めて歴史というものの素晴らしさや重みを学んだ気がしました。
さらに、東京国立博物館を訪れたときもう一つ感じたことがありました。それは、日本人より外国人の来客者のほうが多いと感じたことです。外国人の方のほうが日本のことを知ってくれようとしていることにとても驚くと同時に少し日本人として恥ずかしくなりました。これからはもっと日本の歴史について興味を持って知っていかなきゃいけないと考えさせられました。
また、母の韓国の友人が私の研究に協力してくれたことにとても感謝しています。実際に現地を知る人に話を聞くことができとても良い体験になりました。
今回の研究を通して、研究の本当のゴールは、自分が持った疑問に対して自分なりの結論を出すことではなく、研究を通して何を学んでそれをこれからにどう活かしていくかを知ることだと思いました。私は、歴史というものの素晴らしさや重みを改めて学びました。また、実際に足を運ぶことの大切さを学びました。これからは、世界に目を向けると同時に、もっと日本そして地元の群馬の歴史に興味を持って気になったことはどんどん調べて、行動し、自信が持てる日本人になれるように努力していきたいです。まずは、この研究のテーマである山王金冠塚古墳をもっと活性化させ、有名にできるように考えていきたいです。

9　参考文献

〈文献・資料〉

・右島和夫　群馬の古墳物語ー東国の古墳と文化を探るー　　上毛新聞社　２０１８年
・前原豊、小島敦子　群馬の古墳を歩く　みやま文庫　２０１０年
・東国文化副読本　群馬県群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会　２０２１年
・金冠塚（山王二子山）古墳調査概報ー環境整備事業に伴う　発掘調査ー
　前橋市教育委員会　１９８１年
・古谷毅　古墳時代　美術図鑑　平凡社　２０１６年
・若挟徹　古墳時代ガイドブック　新泉社　２０１３年
・富田一路　倭・高句麗戦争　東洋文化振興会　１９９８年
・鈴木治　白村江　学生社　１９８６年
・井上秀雄　古代朝鮮　日本放送出版協会　１９７２年
・デジタル大辞泉（電子辞書）　新羅

〈Webサイト〉

・前橋市ホームページ　朝倉・広瀬の文化財を訪ねて　２０２３年7月２３日
https://www.city.maebashi.gunma.jp/soshiki/kyoiku/bunkazaihogo/gyomu/3/4/5462.html
・東京国立博物館画像検索　高麗古碑拓文　２０２３年7月２５日
https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0034178
・NHKforschool　レキデリ　白村江の戦いで日本はどうなったのか　２０２３年7月２８日
https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?das_id=D0005120532_00000
・コトバンク　新羅　２０２３年7月３０日
https://kotobank.jp/word/%E6%96%B0%E7%BE%85-80808#:~:text
・国立中央博物館ホームページ　２０２３年8月１日
https://www.museum.go.kr/site/jpn/home